



## 領域「社会」と個我の目覚め

坂元彦太郎

すべて、名が必ずしも体を現わすものでない、という原則は、領域「社会」のような、その概念を故意に新らしく造りあげた場合には、特にあてはまる。「社会」という語には、しぜんにはば共通な意味ができあがっているので、この本来の意味と、領域「社会」の意味するところのものが混同されがちになるのであるが、両者の区別はどこまでもはっきりさせておく方がいいと、私は思う。ところが、いっそう事態を混乱させるのは、社会という語の本来の意味自体が、人により場合により相当な幅をもって揺らいでおり、また、この領域にまとめられたものに「社会」の名をつけたのは、その本来の意味に通ずるものを相当に強く含んでいるからである。こうしたややこしい関係からくる混乱を避けるために、別の名をつけるか、まとめ方をかえるかすることが考えられるが、さりとて妙案

は浮かばないであろう。だから、いちばんたやすい理解の仕方は、「社会」という名前は、いろいろな面を包みこむ、一つの符号に過ぎないのだと思って、実際にそれに含ませてある中味の具体的な姿に添っていろいろ考えていけばいいのだ、ということになるのではなからうか。

「社会」に含まれているさまざまな具体的なねらいを、大きく分類すれば、三つの分野にわけることができるのではなからうか。第一は、(必ずしも適切なことばではないが)個人的な生活についての、のぞましい態度や習慣をめざすところのものである。清潔や食事などのいわゆる基礎的生活習慣から、自分のことは自分でする、仕事をしんぼうしてしとげるといった態度のようなものが、これに属するのはいうまでもない。しかし、領域の名前が社会とつけてあ

るがために、これらのことが幼児教育の中心のねらいのひとつであり、ここに入れる外にはないということを知っているながら、肩身せまい借家人のように、遠慮しながらそつとつこんでおく、といったやり方をする人がある。たしかに、いわゆる社会性とはちがったものであるが、はっきりとこれらの面が人間生活にもつ重要さを認めて、堂々と領域「社会」の中に位置づけていいと私は主張したいのである。

いうなれば、これらは、より年長の場合には自我の確立とか、良心の目ざめとか、理性的な自覚とかいわれるようになるところの、人間性のいちばん奥ふかくあってその中心になるものへ、通ずるめばえをつちかうことである。幼児にふさわしい形や質においてであるが、端的に、そしてとりおとしなくこれらのねらいをはっきりとりあげることがぞましい。

これはまた、全く平凡に、われわれが幼児にこうあってほしいとのぞんでいることそのものである。のびのびと明るく、すなおで純真である、といった、よく園の教育目標としてかかげてあるようなものも、ここにはっきり所属させていいのではなからうか。

こうした内面的な個人的な自覚への道は、結局は、社会生活の中ではなくまれるものだから「社会」にいらていいのだ、と説明する人もある。また、こうした個人によって社会が成立するのだから「社会」の範囲にはいるという人もあろう。

しかし、こうした内面的な自覚や個人としての態度が育っていくのは、家庭なり、園なりののぞましい社会環境の中での、母や教師からのさまざまな影響によるものであることはいうまでもないが、そうした社会的なものを土台としてつくりあげられる個人的なもの、それ自身として、いわゆる社会的な態度などは質を異にして、いる面をもつことを見逃してはならない。

したがって、領域「社会」は、一口にいつて社会性を伸ばすことなのだ、とかたづけるのは、事態の半分だけのことで、全体を押しはかっている、ということになる。たしかに、これに属するねらいは、たいてい、集団的な生活、社会的な生活をいとなんでいるうちに達成されるものである。しかし、そのねらい自身は、狭義での社会的なものにと區別することができず、努力の目標として、単に対人的な関係を向上させるだけでなく、幼児のひとりひとりの内面的な向上をもめざさねばならない。これは全く自明のことでありながら、「社会」という領域にいれたことによって、何かすみっこに小さくなった借家人のように思う人があはしないかをおそれるのである。

第二の分野は、社会的な、のぞましい習慣や態度を中心とし、第三の分野は、社会的な諸事象への理解を中心とする、と私は考え、それぞれにも、いくつかの問題があると思うが、別の機会に譲ることとしたい。